

近世の古文書と料紙研究の可能性

天野真志

1. 近世文書への眼差し

古文書研究における料紙分析の主要な関心は、古代・中世文書に向けられる。文書の形態的変遷、地域的展開などを系譜論的に検討するには、古代からの変容過程を理解する必要があり、それに続く中世から戦国期における文書の拡大と料紙利用の多様化が議論されている。そのなかで料紙研究は、戦前以来の厚い蓄積のもと、現在に至るまで古文書学における重要な研究課題の一つとして多方面から検討が行われている（富田 2011 など）。

一方、量的に古代・中世期をはるかに超える規模で残存している近世文書に対しては、必ずしも盛んに議論されているとは言いがたい。その背景には、文書主義とも形容される文書を媒介とした近世社会の統治体制や流通・文化の展開などが想定される。その結果、将軍家や大名家だけでなく、各村や町にいたるあらゆる身分・地域で文書が生成され、文書類型の多様化・増大化をもたらした（大藤 2003、工藤 2017 など）。近世段階における文書の質的・量的変容は、古文書研究における論点にも影響し、近世古文書に関する研究は、多くの場合が文書群の整理法や管理形態の分析に注目が集まっている（西田 2016）。

このように、古代・中世文書と比較して、近世文書に関する料紙研究は同様の視角のみで分析することは困難であろう。特に、膨大に残存する被支配層が作成した文書料紙を調査・分析するには、前代との系譜論的な理解に限定されない論点を検討する必要がある。本章では、これまでの研究成果を踏

まえて近世文書料紙の分析に向けたいくつかの展望を見出し、近世古文書研究における可能性を探ってみたい。

2. 近世古文書学・史料学の確立に向けた議論

近世文書をとりまく研究状況を概観すると、近世古文書学の体系化を望む議論が長く唱えられてきた。戦後、古文書の調査が精力的に実施され、全国各地で近世期の史料群が大量に確認されると、伝存する古文書を保存・管理するための運動が展開する。並行して古文書を用いた近世史研究も飛躍的に進展するが、その一方で古代・中世期と比較した近世古文書学の停滞を打破するための提起が行われる。

1976年に「近世史料論」を著した鈴木壽は、「近世文書学ないし近世史料学の後進性」の要因として顕著な史料の性格の変容を指摘し、こうした特質が影響して近世期以降を包摂した古文書学の体系化が困難であったとしている。鈴木は特徴的な事例として文書の激増、特に帳簿類の顕著な増大をあげ、これらと向きあうために領主方・村方・町方といった分類化とそれぞれの整序・体系化、あわせて地域別でのモデル化を通じた多様なデータの整序・体系化を提起する（鈴木 1976）。同様の課題は中井信彦からも近世文書の「体系的なコード」の必要性として提示され（中井 1979）、全国的に展開する文書の調査・保存活動によって確認された近世文書の体系的な理解が求められた。

近世古文書学に関する議論は、1980年代になると、より具体的なかたちで展開される。高木昭作は、「中世に比して、近世古文書学は立ちおけているというよりも、無きにひとしい」と、当時の研究現状を厳しく指摘し、江戸幕府および将軍発給文書の文書名や様式等を示しながら古文書学的知識を活用した史料解釈の重要性を主張する（高木 1986）。同時期に大野瑞男も、「発掘された歴大な近世史料は、その保存および分析検討に終われ、近世史料学ないし古文書学の進展は極めて遅れており、近世史研究と古文書学的研究の跛行的状況は一向に解消されていない」と、近世古文書学の停滞を批判し、膨大な文書の調査・分析を通して基本類型や様式を確定していくことを

提言している（大野 1982、4頁）。

こうした提起が重ねられるなか、近世古文書学の体系化に向けた議論が進められる。笠谷和比古は、文書を理解する要素として、以下の点をあげる。

- (1) 記載内容：文字の読解と内容の理解
- (2) 料紙：文書の媒質としての特性理解
- (3) 様式：機能性によって構成される類型の析出
- (4) 存在：個別具体的な文書および文書群の存在構造解明

笠谷は、これらの要素を分析することによって文書を全体的に理解しようと指摘し、主に(3)・(4)を中心的に検討して近世武家文書の類型を論じる（笠谷 1998）。

また、大藤修は、近世文書の特質を文書の大量発生とそれともなう形態の多様化として整理する。特に、「冊子型文書＝帳簿」が近世期に大量に作成され、形態も多様化することをあげ、膨大な情報伝達が求められた近世社会における史料学的特質として重視する。大藤は、それまで等閑視されてきた近世文書の形態論的観察の重要性を論じ、冊子型文書の形態名称確立に向けた試論を提示する（大藤 1991）。なお、大藤の研究では、文書料紙についても形態論的観点から言及しており、主に徳川将軍発給文書については権威的側面から、幕府老中および庶民文書は実用的側面からその特質を分析している（大藤 1992）。

そのほか、近世文書に関する研究は、機能論的分析を深化させた藤田覚や、将軍発給文書の形態的分析を進めた大野瑞男、藤井讓治、老中奉書や御内書を多面的に分析した高橋修など、主に将軍および大名文書、さらには幕府や大名家文書群を中心に展開している。このように、文書を多様な角度からとらえる研究が進展しているが、高木昭作が「歴史学の側からその成果を生かし、さらに裏打ちするという意味での「体系化」の動向は、まだ感じることはできない」と指摘したように（高木 1996、94頁）、近世古文書研究を「学」として体系的に展開するための議論は現在も模索段階にあるといえる。また、藤井讓治が「近年の近世史料をめぐる世界では、古文書学よりは、史料調査法・

史料整理論に関心が集まり、それをめぐる活発な議論が展開している」と指摘するように(藤井1999、71頁)、近世期の古文書研究が当面する課題として、膨大に伝来する文書群の把握方法に議論が集中している。こうした状況のなか、如何なる視角・手法をもって近世文書を対象とした料紙研究を進めていくかが問われるであろう。

3. 近世料紙研究の現在地点

笠谷や大藤が古文書の形態を検討する要素として料紙に注目していたように、近世史研究においても古文書料紙に対する関心は確認される。

まず、大名発給文書を対象とした研究である。近世期、將軍代替わりに際して徳川將軍より各大名に対して主従関係の表象たる知行宛行状ちぎょうあてがいじょうが発給され、同様にいくつかの大家では、藩主から家臣に対して知行宛行状が発給される。こうした性格を有する知行宛行状について、徳川將軍家発給文書に対して関心が集まるなか(大野1991、2000、藤井2008)、諸大家家についても高橋修が「藩主一家臣の関係が濃厚に投影されていることが予想される宛行状に注目し、陸奥国仙台藩伊達家を対象として宛行状の文言や形態的特徴を分析する(高橋1997・1998)。高橋の研究は必ずしも料紙分析に基づくものではないが、宛行状を通時的かつ多面的に分析し、書式の変遷等を通して文書形態の整備過程、さらには藩内秩序形成の経過を明らかにし、文字情報にとどまらない文書の多面性を具体的に提示した点が注目される。

その後、大名による知行宛行状研究は、本多俊彦による分析が展開する。本多は、加賀藩前田家、仙台藩伊達家、福井藩松平家といった諸大家が発給する知行宛行状に検討を加える。本多の研究は、各地に点在する知行宛行状を精力的に調査し、大家家ごとの形態的特性や時代的変遷を検討するが、その手法として文書料紙に注目した分析手法を採っていることは重要な特徴である。たとえば、仙台藩知行宛行状について、本多は宇和島藩伊達家との比較から分析する。いわく、仙台藩知行宛行状が寛永末から天和期を機にたてがみ★ 縦紙形態による斐紙ひしに統一され、差出書・宛名書等も整備されるのに対し、

元和元年(1615)に仙台藩伊達家から分かれた宇和島藩伊達家の知行宛行状は楮紙ちよしが使用され、仙台藩よりも大型の朱印を用いるなど、仙台藩知行宛行状との顕著な相違が見られるという。しかし、顕微鏡により繊維を観察すると、宇和島藩知行宛行状は、3代藩主伊達宗贇むねよし期頃から繊維の間隔が詰まる傾向にあり、料紙に打紙うちがみ★を施した可能性が確認される。本多は、知行宛行状で用いられる料紙の使い分けや形態的連関性が、各地の大家でも確認できることを踏まえ、打紙加工が仙台藩知行宛行状に用いる斐紙の風合に近づける加工であると推測し、この現象を家元である仙台藩伊達家を意識した行為の可能性として提示する(本多2013)。本多の分析は、高橋が提起した知行宛行状研究の可能性を具現化した成果であるが、光学的分析によって近世文書の新たな側面を見出したという意味で、料紙分析の意義を示している。

他方、地方文書でも料紙に注目した研究が確認される。高橋修は、租税徴収に際して毎年領主から発給され、近世を通じて保管される年貢割付状ねんぐわりつけじょうおよび年貢皆済目録ねんぐかいさいもくろくに注目し、甲斐国の年貢割付状に用いられる料紙の縦横寸および厚さの変遷を通時的に調査する。その結果、高橋は年貢割付状が17世紀中葉頃に記載内容が確立する一方で、料紙に関しては紙生産の状況に沿って性質が変容することを指摘する。その背景として高橋は、領主層の統制が弛緩する時期に新たな紙漉村落かみすきが勃興したことをあげ、楮や三椏こうぞ みつまたなどの原材料確保をめぐる争論が多発する18世紀以降、一連の騒動に比例して年貢割付状に用いられる料紙の粗悪化傾向が確認されるという。ここでの分析は、村落社会における領主層の統制力・権威の変遷を料紙分析の成果から描き出しており、「文書の料紙について、モノとしての紙という視点から注目することにより、新しく幕府権威の内実を問う視角」を論じてみせる(高橋2011)。

近世特有の文書群に注目し、料紙研究の可能性を検討したものが、天野等による商家文書分析である。ここでは、近世期に江戸問屋仲間として活動した白木屋しらきやに注目し、同文書群の形態、寸法、厚さ、重量調査に加え、繊維や添加物を顕微鏡で分析し、商家文書の物質的傾向を探っている。その結

果、長期的保存を想定した文書には添加物を加えない厚手の料紙を用い、備忘や私信などの必ずしも長期保存を想定しない文書に関しては、添加物が確認されるとともに厚さも不統一であるという傾向が確認されている（天野等2017）。天野等の研究は、膨大かつ多様な文書を蓄積・伝来する近世文書群に料紙分析を加える可能性を探ることが目的とされ、実務的観点から料紙利用の傾向を検討する。

以上のように、近世文書を対象とした料紙研究は領主文書、村方文書、商家文書を対象とした分析が確認される。これらの研究は、いずれも目的や分析手法は一律ではないが、共通するのは文書の大量発生という近世期の特徴を踏まえた料紙分析方法の模索である。こうした蓄積を前提として、新たな料紙研究、さらには近世古文書研究の展開が求められる。

4. 新たな料紙研究への展望

ここまで見てきたように、近世古文書を対象とした研究が多く蓄積されるなか、古代・中世期のように古文書学として体系的に論じるための視座が模索され続けている。その過程で、膨大な文書群をモノとしてとらえるために料紙が注目され、一方では儀礼的観点からの料紙利用とその傾向、もう一方では実用的観点からの利用形態が分析されている。今後、分析手法の改良によりこれらの分析がより精密に提示することが可能となり、近世文書の類型化や様式判定作業の一助となることが想定される。その場合に課題となるのは、膨大な対象を調査するための手法の検討であろう。これまでの研究でも指摘されてきたように、近世文書への関心は、古文書学的分析よりも大量の文書群を調査し全体像を把握し整理する点に集中しており、モノとして文書をとらえるための議論は必ずしも盛況ではない。そうした状況下で古文書料紙分析を近世文書に広げるためには、これまでの分析で提示された多くの論点を踏まえて分析視角を検討し、膨大な文書群に対応しうる調査手法の設定が必要となる。

文書料紙から歴史情報を抽出する手法が深化し、データの記録・保存技術

も進展しつつあるなか、膨大な近世文書を多角的にデータ化し解析するための準備も整いつつある。このことは、文書群の整理や記録・管理の面でも大きな進展に寄与できるものであろう。これらの技術を活かし、文書群を総体的に調査・分析することで、近世文書料紙研究、さらには近世古文書研究の新たな展開が期待される。

参考文献

- » 天野真志・富善一敏・小島浩之「近世商家文書の料紙分析試論：武蔵国江戸日本橋白木屋大村家文書を例として」『東京大学経済学部資料室年報』7、2017
- » 大野瑞男「領知判物・朱印状の古文書学的研究」『史料館研究紀要』13、1981
- » 大野瑞男「近世古文書学の課題」『歴史評論』389、1982
- » 大野瑞男「領知判物・朱印状」再論」『東洋大学文学部紀要』53 史料学篇 25、2000
- » 大野瑞男「老中奉書と老中制度」同編『史料が語る日本の近世』吉川弘文館、2002
- » 大藤修「近世文書論序説（上）」『史料館研究紀要』22、1991
- » 大藤修「近世文書論序説（中）」『史料館研究紀要』23、1992
- » 大藤修「近世の社会・組織体と記録」国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上、柏書房、2003
- » 笠谷和比古『近世武家文書の研究』法政大学出版社、1998
- » 兼平賢治「「藩主御内書」の基礎的研究—盛岡藩主発給御内書」を例に一」『日本史研究』605、2013
- » 工藤航平『近世蔵書文化論』勉誠出版、2017年
- » 鈴木壽「近世史料論」『岩波講座日本歴史 25 別巻 2』岩波書店、1976
- » 高木昭作「近世史研究にも古文書学は必要である」永原慶二等『中世・近世の国家と社会』東京大学出版会、1986
- » 高木昭作「近世史料論の試み」『岩波講座日本通史別巻 3』岩波書店、1995
- » 高橋修「老中奉書の文書学的研究」『歴史』86、1996年
- » 高橋修「近世に於ける御内書についての研究」『古文書研究』43、1996
- » 高橋修「仙台藩知行宛行状の文書学的研究」『文化』60-3・4、61-1・2、1997・

- 1998
- » 高橋修「甲斐国年貢割付状との対話に向けて」『山梨県立博物館研究紀要』5、2011
 - » 富田正弘「古文書料紙研究の歴史と成果」『東北中世史研究会会報』20、2011
 - » 中井信彦「近世史料体系化への道」『史料館報』30、1979
 - » 西田かほる「近世史料と調査論」『岩波講座日本歴史 21 史料論』岩波書店、2016
 - » 福田千鶴「御内書」の史料学的研究の試み」『史料館研究紀要』31、2000
 - » 藤井譲治「近世史料の調査と古文書学」『古文書研究』50、1999
 - » 藤井譲治『徳川将軍家領知宛行制の研究』思文閣出版、2008
 - » 藤田覚『近世史料論の世界』校倉書房、2012
 - » 本多俊彦「加賀藩知行宛行状の古文書学的検討」『加能地域史』56、2012
 - » 本多俊彦「仙台藩の知行宛行状について」『東京大学経済学部資料室年報』3、2013
 - » 本多俊彦「加賀藩文書管理の一様相一知行宛行状と「絶家」」『高岡法科大学紀要』25、2012
 - » 本多俊彦「福井藩の知行宛行状について」『古文書研究』80、2015
 - » 本多俊彦「前田利常後見期の加賀藩知行宛行状について」『湯山賢一編『古文書料紙論叢』勉誠出版、2017

異分野連携からの視点

渋谷綾子

1. 異分野連携とは何か

学際研究、または学際的研究とは、単独の学問分野では解決の難しい研究領域に対して、二つ以上の分野を統合して横断的に進める研究や、一つの目的・関心のもとに多くの隣接する学問領域が協業する研究を指す。学際研究には、異分野連携と異分野融合の二つがある。両者はどちらがうのだろうか。

異分野連携は、多数の分野がそれぞれの範疇^{はんちゆう}において共通の目標を達成しようとすることであり、異分野融合はほかの分野と対話して、自分と異なる研究観や世界観と触れることで自身の専門分野のとらわれから解放し、新たに自身の専門観を再構築することである（京都大学2019）。古文書や古記録類^{りようし}の料紙は、古文書学（本書第1部参照）や歴史学（本書第1部参照）の分野だけでなく、植物学、製紙科学、文化財科学などほかの研究分野でも、形態情報や物理的性質に関する検討が進められている。つまり、異分野連携による研究成果が蓄積されている。この章は、①料紙の原料である繊維素材とネリ^{ねんざい}（粘剤）、②添加物^{のり}と糊、③料紙の製作時期と成分、という三つの検討項目に沿って、どのような異分野連携の研究が進められているのか、近年の動向を紹介する。

2. 繊維素材とネリへの注目

(1) 繊維素材とDNA研究

料紙の繊維素材であるコウゾ^{カウゾ} (*Broussonetia kazinoki* Sieb. x *B. papyrifera* (L.)